

## 7 塩酸アミオダロンによる肺障害の1例

伊藤 徹(研)・太田 毅\*  
 細井 牧\*・田島 俊児\*・寺田 正樹\*  
 田村 雄助\*\*

済生会新潟第二病院臨床研修センター  
 同 呼吸器内科\*  
 同 循環器内科\*\*

症例は65歳、女性。喫煙歴なし。X-11年検診で高血圧を指摘され当院循環器内科通院加療を開始された。X-1年2月発作性心房細動、肥大型心筋症の診断で塩酸アミオダロン(100mg/日)を追加された。X年8月乾性咳嗽を自覚した。同年9月胸部レントゲン、CTで間質性肺炎が疑われ当科紹介受診、入院した。SpO<sub>2</sub>は室内気で92%と低下、背側両下肺にfine cracklesを聴取、血液検査でKL-6、SP-Dの上昇を認めた。CTでは両肺気管支血管束周囲に若干の牽引性気管支拡張像を伴う非区域性の浸潤影、BALでは総細胞数増加、リンパ球・好酸球分画の上昇、TBLBでは肺胞内線維化を認め器質化肺炎パターンを呈していた。塩酸アミオダロンによる肺障害を考え同薬剤を中止しステロイドセミパルス療法を開始、プレドニゾン30mg/日内服の後療法を行い呼吸不全、画像所見の改善が得られた。塩酸アミオダロンによる肺障害は用量依存性との報告が多いが、本例のように低用量、少ない積算量での発症もあり注意が必要である。

## 8 皮下多発結節を有し Erdheim - Chester 病と診断した1例

遠藤麻巳子(研)・高井 千夏・朝川 勝明  
 渡辺 博文・悴田 亮平・細島 康宏  
 川村 和子・風間順一郎・成田 一衛  
 清水 彩子\*・苅谷 直之\*・梅津 哉\*\*

新潟大学医歯学総合病院第二内科  
 同 皮膚科学分野\*  
 同 病理学分野\*\*

Erdheim - Chester 病(ECD)は、非ランゲルハンス細胞組織球症の一型であり世界でも数百例の報告しかない比較的稀な疾患である。組織球が全身臓器へ浸潤し多彩な症状を呈するが、病変分布が多岐にわたるため診断が困難である場合も少なくない。

今回我々は、特徴的な皮膚所見を呈したECDの1例を経験したので報告する。

症例は49歳、女性。入院2ヶ月前に偶発的に腹腔内多発結節を指摘され、その後全身浮腫、胸水が増強、また体幹の皮下組織内に無数の結節が出現し増加した。皮膚生検でCD68陽性、S-100陰性、CD1a陰性の単核球集簇を認め組織球の関与が疑われた。また18FDG-PET/CT検査で両側大腿骨遠位から下腿骨髄に左右対称の異常集積を認め、組織所見と合わせECDと診断された。ECDの皮膚所見としては黄色種が有名であり本例のような多発結節を呈する報告は少ない。また、骨病変は約半数で合併する代表的な臓器病変の一つであり、本例の画像所見も過去の報告に合致し典型的であったが、骨痛などの自覚症状は伴っておらずECDの診断におけるPET/CTの有用性が示唆された。